

まじわり 147 号

2015 年 10 月 11 日発行

【巻頭言】『思いやりのある大祭司』

司祭 バルナバ 菅原裕治

今回は、「ヘブライ人への手紙」五章一節～一〇節から学びます。この箇所は、大祭司キリスト論の序論です。

そもそも大祭司とは、ユダヤ教の神殿祭儀の祭司制度における最高位です。ヘブル書の著者は、「大祭司はすべて人間の中から選ばれ、罪のための供え物やいけにえを献げるよう、人々のために神に仕える職に任命されています」と説明しています（五・一）。次に「大祭司は、自分自身も弱さを身にまとっているの、無知な人、迷っている人を思いやることができるのです」とも続けています（五・二）。ヘブル書が書かれた時代には、すでにエルサレムの神殿は崩壊していたと思われますが、大祭司という職務に関する概念は、まだユダヤ人の間では残っていました。また福音書の物語では悪役ともいえる大祭司ですが、本来は、このような慈悲深く尊い存在です。しかし、人間的にどれほどすぐれた大祭司であっても、人間である限り、自分自身の罪のために、神に犠牲と供え物を捧げる存在でもあります。つまり大祭司としての栄誉は、自分によってではなく、「アロンもそうであったように、神から召されて受けるのです」（五・四）。

このように著者の大祭司キリスト論は、それまでの大祭司を前提としており、キリストの大祭司職は、それまでの大祭司と類似点と相違点があります。類似点は、キリストの大祭司職も、神に任命されたということです。相違点は、永遠の祭司であるということです。そのことは、詩篇一一〇編四節が引用され「また、神は他の個所で、『あなたこそ永遠に、メルキゼデクと同じような祭司である』と言われています」と述べられています。

しかし、キリストの永遠の祭司であるという点ですが、それは最初から属性として供えられたわけではありません。イエス様が肉において激しい叫びと涙とをもって、祈りと願うという供え物を捧げ、御自身を犠牲として捧げたが故に、祭司として任命され、その苦しみを通して、従順を学び、完全な者とされたがゆえに、「御自分に従順であるすべての人々に対して、永遠の救いの源となり、神からメルキゼデクと同じような大祭司と呼ばれたのです」（五・九から一〇）。著者の展開する大祭司キリスト論は、イエス様の御生涯にある苦しみと従順さに基づいて展開されているのです。

この大祭司キリスト論は、古い祭司制度の終焉を告げると同時に、新しい祭司制度の開始を意味しています。それは同時にキリスト教のユダヤ教からの明確な決別をも意味していると思います。しかし、それは古いなにかを捨てて、全く新しいなにかを創造したわけではありません。

福音書の物語で、イエス様は、大司祭を含めた祭司たちや律法学者たちを批判し

ましたが、神殿そのもの、律法そのものを批判したわけではありません。そもそも祭司も律法学者も神様と人との橋渡しをする役割ですが、彼らがその役割をしっかりと担っていなかったからです。イエス様は、十字架に至る苦しみと従順さを通して、その役割を全うされたのであり、だからこそ、それまでと全く異なる人間の現実と神の真実との橋渡しをする完全な仲保者に他ならないのです。

ヘブル書の著者が、イエス様のご生涯についてどれほど真実を知っていたかどうかは不明です。また現代は、人間としてのイエス様について様々な推測が可能となっています。しかし、それらイエス様についての推測がどのようなものであっても、大切なことは、イエス様が、最初から超人的な存在であったわけではないということです。

イエス様は、他の人間と同じ弱さを持った人間でした。しかし、罪を犯されませんでした。そのような方が私たちの傍らにおられ、私たちの悲しみも、悩みも、ありとあらゆる事柄を共に担って下さるのです。そう認識する時、イエス様とはキリストであり、神の子であり、人間の罪を解決して下さる大祭司であると理解出来るのです。

人間の弱さそれ自体は、罪ではありません。ただ弱さは罪に結び付きやすいのです。弱さを隠すために嘘をつくことがあります。弱さを守るために、強さを求めてしまいます。そして、弱さで自分が傷つく前に、他者を傷つけてしまうのです。しかし、弱さは他者を思いやる方向へと向けることもできます。そして他者を思いやることの延長上に真の平和があります。

十字架で死なれたイエス様は、弱さを隠す必要も飾る必要もないことを示して下さいました。そして弱さとは、現実生きる私たちが、神の真実を反映させるために用いられる要素であることをも示して下さいました。弱さにこそ、神様の真実が現れる。そのことを示して下さいました、思いやりのある大祭司であるイエス様を信じ続けたいと思います。